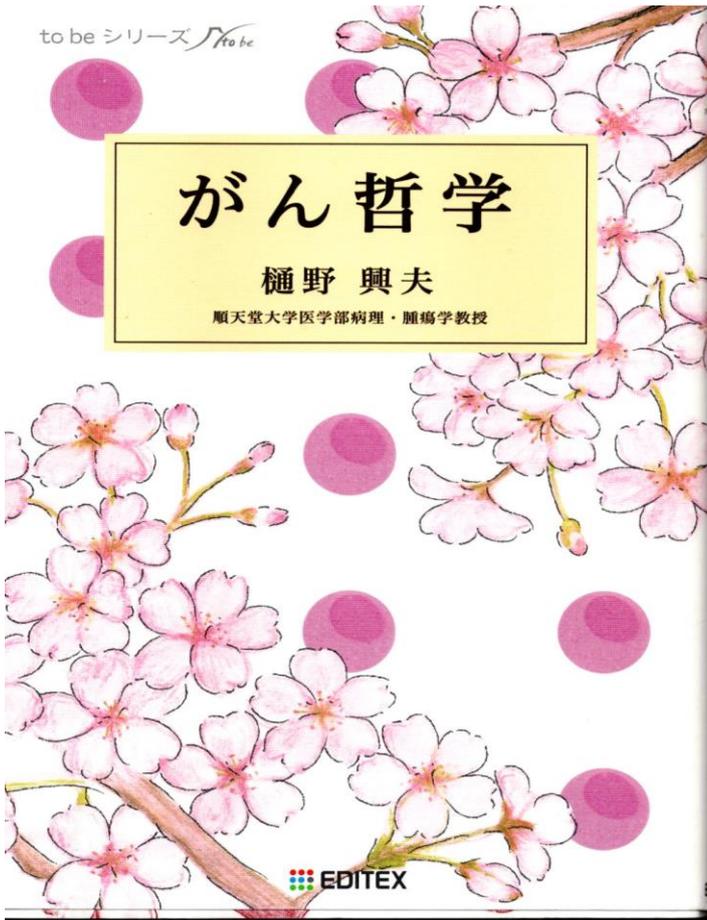


『潜在的な需要の発掘』と『問題の設定』～『誰に出会うか』～

2023年10月11日、東武東上線で上福岡メディカルカフェ開設記念講演会（上福岡教会に於いて）に赴いた（添付）。上福岡駅に有山敏氏が迎えに来て頂き、上福岡メディカルカフェ代表佐藤紀子親子の車で会場に向かった。会場は、多数の参加者であった。佐藤紀子氏の司会で、小野島みき子氏の熱唱で始まった。

筆者は、2011年に発行された『がん哲学』（EDITEX 出版）（添付）を抜粋し【『病理学』とは、病気の根幹を追求しようとする『the study of the diseased tissues』である。病気の本態が 遺伝子レベルで具体的に考えられるようになり、21世紀は、病理学にとってエキサイティングな時代の到来である。『広々とした病理学』とは、『病理学には限りがないことをよく知っていて、新しいことにも自分の知らないことにも謙虚で、常に前に向かって努力しているイメージ』（菅野晴夫先生：1925-2016の言葉）である。】と述べ、【『がん哲学』は、『潜在的な需要の発掘』と『問題の設定』の提示である】とさりげなく語った。

また、2021年に発行された『がん細胞から学んだ生き方～「ほっとけ 気にするな」のがん哲学～』（へるす出版）から、【「1919年パリ講和会議が開催されている頃、『スペインかぜ』がフランスでも猛威をふるっていて、パンデミック（世界流行）で、感染者6億人、死者4,000万～5,000万人にも達したと推定されている」と、以前に聞いたものである。そのとき、新渡戸稲造（1862-1933）はパリにいて、その後、国際連盟事務次長に就任している。トーマス・カーライル（Thomas Carlyle、1795-1881）の影響を受けた新渡戸稲造は、『common sense（社会常識）を備えもった柔軟性のある人格者』と謳われている。『コロナ時代の生き方』が問われている現在、『新渡戸稲造なら、何と語るのであろうか？』の静思の日々である。『やるだけのことはやって、後のことは心の中で、そっと心配しておれば良いではないか。どうせなるようにしかならないよ』（勝海舟 1823 1899）の言葉】が鮮明に蘇る日々である。筆者は個人面談の時も与えられた。今回は、【『何を学ぶか』も大事だが、それ以上に『誰に出会うか』がもっと大切である & 『ひとり、静まる時をもちましよう』は、読書の原点でもあろう】の復習で、大変有意義な貴重な時となった。



「ほっとけ 気にするな」の
がん哲学

樋野 興夫
順天堂大学名誉教授
新渡戸稲造記念センター長
恵泉女学園理事長

**がん細胞
から学んだ
生き方**

**がん細胞で起こることは、
人間社会でも起こる**

病理医として顕微鏡でがん細胞を覗いてきた筆者が、ミクロの世界の生命現象と人間社会というマクロの世界を考える新しい領域として「がん哲学」を提唱、医療と患者の隙間を埋めるべく「がん哲学外来」を開設した。メディカルカフェも全国に展開され、患者と家族の交流の場となっている。



へるす出版